

巻頭言 「福音にふさわしく」

宇野 元

田舎牧師ジョン・エイムズは隅におけない神学者です。彼が息子への手紙に何気なく記すことのなかには、地味で控えめながら、私たちが思いめぐらすのに役立つ言葉が散りばめられています。ベランダでの夜の憩いのときの、ジャックとのやりとりを伝えるくんだり、彼は人間は一人一人が異なる文明社会であると書きます。

「重要な特徴すべてにおいて、ぼくらはお互い、大きな謎だ。そして一人ひとり、異なる言葉話している。また異なる美学、異なる法学をもっている。そうぼくはつよく思う。人はみな、小さな文明社会のようなものだ。それは先立つ無数の文明の廃墟のうえに築かれていて、ぼくらはバラバラに、自分の見方で、これはきれいだとか、これは許容できるとか判断している。しかし、ただちに言っておきたいと思う。ぼくらは大概、自分の基準を満たすことができずにもがいている。」

猫が猫の世界観をもつように、私たちも限界のあるものの見方を持つ。またそれぞれに、好みの思想や、身についた考え方もつ。このことは、いちがいに否定すべきことではないでしょう。なぜなら、この事実を否定することは自分と自分に与えられているよいものを否定することになるからです。むしろ一人一人が自分に忠実になり、自分に与えられているよいものを発揮するよう招かれているでしょう。と同時に、自分の基準を他者に押し付けることのないように。なにしろ、自分自身が自分の基準を満たしていないのですから。

カールバルトが、説教者に注意を与えています。説教者はつつしみ深くある義務があると。すべてのクリスチャンにとって参考になると思います。福音にふさわしく生きることの。

「私たちは事柄を捉えるには至っていない。たしかに、手元にある蓄えから語るということがある。言葉の力や、思想の力というものがあるだろう。しかしそれはいまだ福音ではない。福音は、私たちの思想や、私たちの心のなかにでなく、聖書のなかにある。」

そして、実際的なアドバイスを与えています。だれもが愛着のある考え方もっている。それをまぬがれることは難しいが、それを全面に立ててはならない。